立命館人間科学研究，17，61-74，2008.

研究論文（Articles）

『ふつうの結婚』を目指させた親の性別役割意識

―1980年代に結婚を経験した女性たちの語りから―

谷村ひとみ[1)]・サトウタツヤ[2)]・土田　宣明[2)]

（立命館大学大学院応用人間科学研究科[1)]・立命館大学文学部[2)]）

Gender Role Consciousness of the Parents which Let Daughters Aim at "The Normal Marriage"

―From the Talk of the Women who Married in 1980's―

TANIMURA Hitomi, SATO Tatsuya, and TSUCHIDA Noriaki

(Graduate School of Science for Human Services[1)] and College of Letters, Ritsumeikan University[2)])

Parents' influence on daughter's perception of marriage during the 1980's was investigated. We interviewed nine women in their 40's (mean age 46.3 years; 7 housewives and 2 working women) who got married in the 1980's. They were asked about details of their marriages, the stories of their early lives and their parent's opinions about their marriage. After using the KJ method, the Trajectory Equifinality Model was applied to the analysis. This indicated that there were three trajectories to their marriages. (1) Differences in the recognition of the mother's image. (2) Differences in their parent's attitude to marriage. (3) Differences in the idea that a woman should become a full-time housewife after marriage. There were two parent related factors that influenced the daughter's marriage: the daughter's recognition of their mothers, either positive or negative; and the expectation of their fathers, i.e., the daughter should be a full-time housewife after marriage.

Key Words：marriage of 1980's, "Normal marriage", gender role consciousness of the parents
キーワード：1980年代の結婚，『ふつうの結婚』，親の性別役割意識

1．問題と目的

本研究は，女性が結婚するという経緯に及ぼす親の影響を，「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の意識変化が盛んとなった1980年代という時代背景とともに，その語りから説き起こし考察する目的で行った。

1980年代は，「女の時代」といわれ（落合，2007），70年代から芽生え始めた「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の意識変化が盛んとなった時代である（斎藤，2001）。「脱専業主婦」への意識変化の始まりには，戦後，憧れであった専業主婦の一般化があった。大正から戦前までの専業主婦

とは豊かな結婚生活の象徴であり憧れであった。この専業主婦が成り立つには，夫は農業や家業ではない職住分離の職業に従事し，且つその収入で生活が営めるという経済力が必要である。したがって，当時にあっては限られた新中間層だけが実現できた結婚生活であった。戦後，高度経済成長によって急増したサラリーマン世帯は，この憧れの専業主婦を目指した。さらに高度経済成長は「三種の神器」（白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫）に代表される家電製品の普及をもたらし，主婦は家事労働の大幅な軽減と時間的余裕，そして「消費の女王様」としての地位も手に入れ，専業主婦はますます憧れの座となっていった。こうして戦後，人々は憧れであった専業主婦を実現し「男は仕事，女は家庭」の性別役割意識を定着させた。しかし，この専業主婦も1970年代には一般化し,「憧れ」から「平凡」の代名詞となっていった。そして，時間的余裕や生活の安定を実現した主婦たちが，次に求めたのは自身の生き甲斐であり「脱専業主婦」であった（斎藤，2001）。

また，「脱ＯＬ」への意識変化の始まりにも，ＯＬという職業が女性の憧れであった背景がある。大正から戦前までの女子の就労は小学校を卒業または中退後，女工や女中に従事する者がほとんどであった。したがって，女学校に進学できる者は限られた階層の女子だけであり，その女学校を卒業した女子たちが，「きれいな仕事」と求め憧れたのがＯＬであった。さらにＯＬの職場経験は良い家庭づくりに必要な能力を養うものとして結婚と結びつけられ（金野，2001），憧れの専業主婦へとつながるライフコースの一端を担った。しかし戦後，女子の高校進学率の上昇に伴いＯＬも急増し一般化した。そして専業主婦と同様，一般化したＯＬの次に求めたのが，自分らしさであり「脱ＯＬ」であった（斎藤，2001）。

このように，1980年代は戦後から70年代にかけて一般化し定着した，ＯＬ→専業主婦というライフコースや「男は仕事，女は家庭」という性別役割意識の，次を目指す流れとして「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の意識変化が盛んに現れた時代であった。

一方，女性の結婚に関する意思・態度や性役割意識は，親の影響を受けることが示されている（伊東，1997；伊藤，1995）。伊東（1997）は，女性の結婚意思に有意な影響を及ぼすのは女性自身の「結婚に対する一般的態度」（肯定的・否定的）であり，その「一般的態度」は「親の結婚の幸福度」，つまり親の結婚生活が幸福か・否か，という娘の認知の違いが影響すると述べている。また伊藤（1995）は，親の性別分業意識や性役割期待の養育態度を娘がどのように認知するか（肯定的・否定的）の違いによって，娘の職経歴選択（専業主婦型・職業主婦型）に影響を及ぼすことを明らかにしている。それによると，親の伝統的役割分業や家庭第一主義の態度を娘が肯定的に認知するほど，自らも専業主婦型の職経歴を指向し，一方，否定的であれば職業主婦型を指向すると述べている。

これらの先行研究より，女性の結婚までの経緯は職経歴選択も含め，親の影響を受けて形成されることが考えられる。では「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の意識変化が盛んとなった1980年代に，結婚した女性たちは一体どのような親の影響を受け，如何なる経緯で結婚へ至ったのか。それらを明らかにする目的で，その語りから以下の視点で分析を行った。分析の視点は先行研究を参考に，①結婚の形態（専業主婦・継続就業）とその選択の理由，②子ども・学生時代の結婚の展望とその理由，③娘の結婚に対する親の意見や態度とその内容，④娘から見た父親像・母親像・夫婦像の４点とした。尚，娘とは研究協力者で，親とは研究協力者の親を指す。

Table 1　研究協力者のプロフィール

事例	調査時の年齢	学歴	結婚時の職業	現在の職業	結婚年齢
A	48	高校	専門職	専門職	24
B	47	高校	事務職	自営業	27
C	47	短大	事務職	専門職	22
D	48	高校	専門職	専門職	28
E	44	中学	専門職	専門職	27
F	47	高校	事務職	専門職	22
G	45	高校	事務職	自営業	23
H	44	高校	事務職	サービス業	23
I	47	短大	事務職	（専業主婦）	27

2．方法

研究協力者

2007年現在44～48歳の女性，結婚経験者，９名。平均年齢は46.3歳であった。

選定は，筆者の知人および知人の紹介を通じて行った。内訳は，就職した年1978～1981年，結婚した年1982～1990年であった。研究協力者のプロフィールはTable 1 に示した。プロフィール内容については，プライバシー配慮のため本稿に必要と考える最低限度の項目とした。

手続き

協力者たちに半構造化面接を行った。面接の内容はTable 2 に示した。面接の項目は，分析の視点をもとに結婚までの経緯を中心に，生育歴・進路・職業選択の項目も含めた。面接は充分なインフォームドコンセントを行い，了解を得て録音した。内容の確認や追加については，電話等で補足インタビューを行った。

面接期間は補足インタビューも含め，2006年８月～11月，2007年12月～2008年３月であった。面接場所は調査協力者の希望に従い，自宅などインフォーマルな場所で個別に実施した。面接時間は２～５時間／人。面接回数は１回が５名，２回が４名であった。

Table 2　面接項目と内容

質問項目	内容
1．生育歴	①両親の職業 ②どのような両親か－父親像・母親像 ③両親の夫婦関係・結婚生活はどのような様子だったか ④兄弟・姉妹の印象と関係 ⑤どのような家庭だった
2．結婚について	①将来，いずれは結婚するだろうと思っていたか？ ②結婚した年齢 ③結婚形態：専業主婦・継続就労か ④その結婚形態を選択した理由 ⑤子ども・学生時代，どんな結婚を展望していたか ⑥展望したのは，いつ頃か？ ⑦展望した理由 ⑧両親は娘の結婚について，どう考えていたか ⑨結婚について親からの示唆の有無と内容
3．進学・職業選択について	①どのような進学・職業選択をしたのか？ ②その進学・職業選択した理由 ③親は娘の進路・職業選択について，どのように考えていたか ④親がそう考えた理由

分析

作成した逐語録をもとに，以下のプロセスで分析を行った。

まず，逐語録をくり返し精読し，各協力者の結婚までの全体像を把握した。そして，事例ごとに，ＫＪ法に準じ，逐語録の最初から順に意味のまとまりごとの単位に区切り，その内容を端的に表す見出しを付けカードに記載していった(例，厳格な父親，ふつうに結婚したかった)。この作業を，これ以上まとめられないところまでくり返し，最終的に18個のまとまりとなった。その18個のまとまりを，分析の視点，①結婚の形態とその選択の理由，②子ども・学生時代の結婚の展望とその理由，③娘の結婚に対する親の意見や態度とその内容，④娘から見た父親像・母親像と親の夫婦像の４点との関連をふまえ，模造紙上に時系列に並べた。この時点で本

Table 3　TEMの用語の説明と本研究における意味

用語	意味	本研究における意味
等至点：EFP (Equifinality Point)	多様な経験の径路がいったん収束する地点（両極化した等至点 polarized EFP） 等至点を一つのものとして考えるのではなく，それと対になるような，いわば補集合的な事象も等至点として研究に組み入れ，意図せぬ研究者の価値づけを未然に防ぐ	研究協力者が経験した結婚 『ふつうの結婚』 『継続就業の結婚』
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	ある選択によって，各々の行動が多様に分かれていく地点	①娘が認知した母親像の違い ②娘の結婚に対する親の態度
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点	娘が認知した母親像の違い
社会的方向付け：SD (Social Direction)	選択肢における個人の選択に有形無形に影響を及ぼす諸力（社会的方向づけ）を象徴的に表したもの	「結婚すれば，家庭に入るのが当たり前」という，当時の社会通念とそれに基づく，寿退社の慣習

研究の分析の視点に関連のないまとまり（例，兄弟・姉妹関係など）は除いた。時系列に並べた関係図を，複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model. 以下，TEM）を用いた図によって可視化した。TEMは人間の経験を，その時間的変化と文化・社会的文脈との関係の中で捉え記述するための方法論である。ある行為や選択を，等至点（Equifinality Point：以下，EFP）としていったん焦点化し，時間的経緯の中で径路の多様性を記述する（サトウ・安田・木戸・高田・Valsiner, 2006）。用語の説明と本研究における用語の意味をTable 3に示した。

3．結果・考察

協力者の結婚までの全体像

研究協力者9名のうち，7名が家庭に入る結婚（専業主婦），2名が仕事を続ける結婚（以下，継続就業の結婚）であった。

本研究の特徴に，「ふつうに結婚したかった」「考えていたのはふつうの結婚」というように，協力者の多くが家庭に入る結婚を『ふつうの結婚』と象徴していたことが挙げられる。

協力者たちは，家庭に入る結婚・継続就業の結婚，どちらであっても親からの影響を受けていた。親の影響は大きく分けて2つあった。1つは，両親の結婚生活における母親の姿を，娘がどのように捉えどう思ったのか（以下，母親像の認知）。2つ目は娘の結婚に対する父親の態度の違いであった。その態度の違いは，娘に性別役割を期待し専業主婦を望む態度と，娘の進路については結婚も含め自律性を尊重する態度であった。

また，結婚への径路は大きく3つあった。1つは母親像の認知の違いによるもの，2つ目は娘の結婚に対する親の態度の違い，3つ目は，「女性は結婚すれば，家庭に入るのが当たり前」という当時の社会通念によるもの，この3つであった。

以上のことから，本稿は協力者たちの結婚までの径路について，主に9名のうち7名が至った『ふつうの結婚』を中心に，娘の母親像の認知の違い，そして娘の結婚に対する親の態度の違いに焦点を当て論じた。協力者の語りは「　」で，「　」の中の“　”は他者からの発言や自身の気持ち・考えたことなど，補足説明は（　）で示している。

なお本稿では，協力者たちが自ら語り象徴した『ふつうの結婚』という用語を本研究の特徴

と考え，そのまま用いることとした。

したがって，本稿の立場は，あくまでもどのような結婚が“普通”で，どのような結婚が“普通ではないか”を示すものではない。

結婚までの径路―TEMを用いて―

協力者たちの結婚までの径路と母親像の認知及び親の態度との関係を時系列に示した（Figure１）。

等至点（EFP）は『ふつうの結婚』・『継続就業の結婚』とした。娘が認知した母親像については進学や就職以前の，より早い段階で認知されており，また，その認知がpositive・negativeかで，結婚への展望が異なったことから，１番目の分岐点（①BFP）とした。これまで，価値形成をTEMに組み込むことには賛否両論あったが，Valsiner（2001）が“ある事態に対する価値づけがその後の行動を分化させる”という指摘に基づき，分岐点として娘が認知した母親像を設定した。結果として，多くの女性は母親に対する価値づけによって行動を規定する傾向があるため，必須通過点（OPP）としても設定することになった。また，母親について「おとなしい人（G）」「優しい（I）」など，その語りが直接的に自身の結婚展望に関わっていない認知については，neutralとして区別した。そして，neutralと区別した者は，父親の娘の結婚に対する態度の違いで，その後の径路が異なったことから，この父親の態度を２番目の分岐点（②BFP）とした。また，本研究で該当するものはなかったが，先行研究（伊東，1997；伊藤，1995）に鑑み，可能性としてあり得る径路を可視化した。

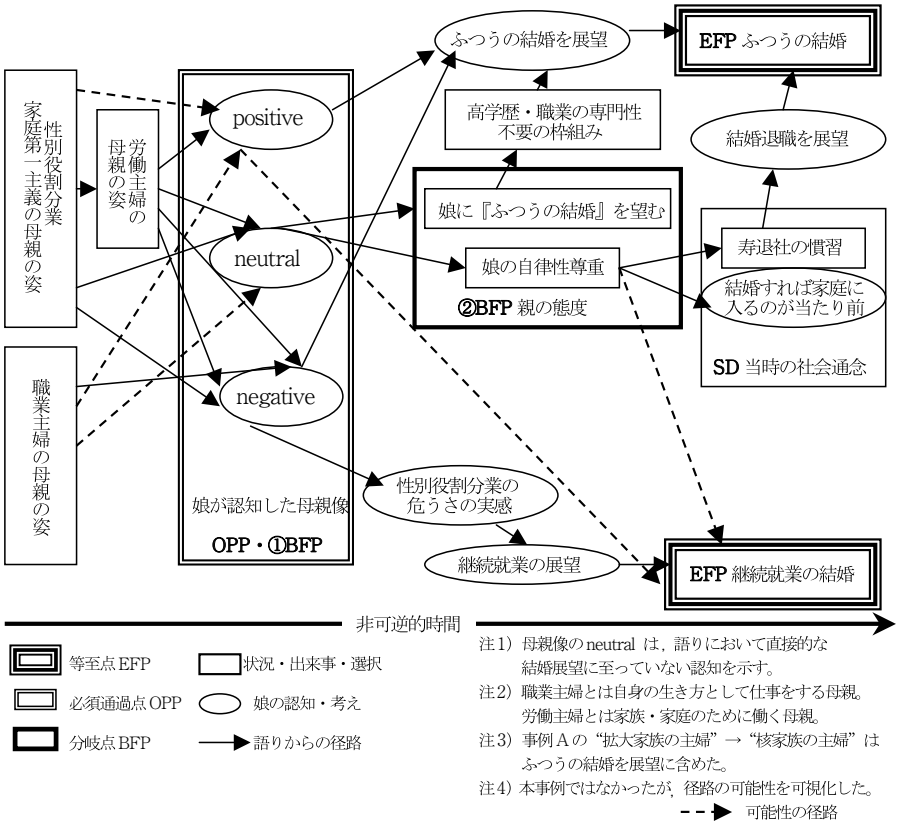

Figure1　協力者の結婚までの径路および母親像の認知・親の態度との関係

多様な母親像の認知と娘の結婚展望の違い

協力者の母親たちは専業主婦と働く母親の２つに分かれた。その母親たちの姿を娘である協力者たちは，様々に捉え自らの結婚展望を抱いていた。以下に，多様な母親像の認知と展望の違いを示した。

母親の働く姿から展望した『ふつうの結婚』

母親の働く姿には２つのタイプがあった。１つ目は，両親の結婚生活は性別役割分業の「男は仕事，女は家庭」であり，母親は家族・家庭・夫のために尽くす家庭第一主義であった。その母親が働くということは，あくまでも家族や家庭，夫を支えるための労働である（以下，労働主婦）。この労働主婦は協力者９名のうち６名の母親が該当し，働いていた期間やその働き方は異なり，農業・家業・親戚の仕事などに従事していた。

働く母親の２つ目は，その働く意味が，家族・家庭のためだけではなく，母親自身の生き方として仕事を続けることであった（以下，職業主婦）。

労働主婦の母親から展望した『ふつうの結婚』

事例Ａ

「10代の後半頃には，できれば早く結婚して，家庭に入って子どもを育てながら主婦したかったんです。それは，抱いていた夢。私が知っている母親は働き詰めでした。結婚当初は専業主婦だったのですが。それも，大家族（親戚・夫の兄弟との拡大家族）の世話に翻弄される毎日でした。ある時からは生活が苦しくなり，親戚の仕事をし家計を支えながらやっていました。痩せて，やつれていった母を覚えています。ですから母のようには，なりたくなかった。だから結婚したら奥様（専業主婦）したかった。」

事例Ｂ

「私は小学校くらいまでには，『ふつうに結婚』して暮らしていくものだと思っていたかな。『ふつうに結婚』とは専業主婦でだんな様に働いてもらって，私は家庭を守ります，みたいな。母親は洋裁の仕事をしながら私たちを育ててくれた。両親は最初，別の商売をしていたけど，それを辞めて，母親は洋裁，父親は別の仕事をしました。洋裁の仕事であれば，家で子どもを育てながらできるって，母親が言い出したものです。独学で洋裁を勉強して，夜中まで頑張ってたことを覚えてる。そんな家庭持ちたかった。」

この２つの事例では労働主婦である母親の捉え方が異なった。

事例Ａでは夫や子どもたちだけではなく，夫の兄弟・親戚までも支えるため，働きやせていく母親の姿に大変な苦労を実感している。「結婚したら奥様（専業主婦）したかった（Ａ）」と語った，その「奥様」とは夫と子どもとの“核家族”という意味を指している。したがって，拡大家族を支えるため働く母親の姿を通し，Ａさんは“核家族の専業主婦”を展望した。一方，事例Ｂでは労働主婦の母親の姿を，家計を助け大変な思いをしながらも自分たちを育ててくれたと捉えている。子どもたちに不自由な思い・淋しい思いをさせないよう，家での仕事を選び頑張っていた母親の姿は，Ｂさんの語った「そんな家庭を持ちたかった」に続いている。したがって，Ｂさんは“母親のように家庭を守る結婚”として専業主婦を展望した。

職業主婦の母親から展望した『ふつうの結婚』

事例Ｃ

「母親は，お花の先生とかしていて，たくさんのお弟子さんをお教えていた人なので。家業も自分が全国を飛び回って，家に居ない時はしょっちゅうありますしね。商売を熱心にやって

来た人なので。(中略)思春期の時でも母親とは，人間関係の話とかもしたことがないっていうか，出来ない状態，出来ない母親やった。ほとんどすれ違いというか。母親に対する淋しい思いがあったのかも知れん。（中略）親は私が家業をついでくれるものだと思っていたと思います。（中略）私がそれに反発してしまったから。とにかく，私は早く結婚して早く子どもを産んで，早く家庭を持つというのが，夢だったんです。」

その後，Ｃさんは家業は継がず，就職先を探し，22歳で結婚した。

この事例Ｃでは熱心に仕事に励み，不在も多く接触の少なかった母親に，淋しさや不満を抱いていたことがうかがえる。このＣさんの場合，娘から見た「仕事に熱心な母親像」と，「母への淋しい気持ち」，さらに「家業を継いでくれるだろう」という親の期待とが相まって，反発となっている。高橋（1970）は依存性を「道具的な価値ではなく，精神的な助力を求める要求」と定義し，中・高・大学生の女子を対象に，その依存性の発達的変容を調べている。それによると，母親は中・高・大学生いずれの女子にとっても，重要な依存の対象であった。Ｃさんの語った「人間関係の話とかもしたことがないっていうか，出来ない状態，出来ない母親やった」には，精神的な助力として求めた母親はＣさんの“気持ちのそば”にはいなかったことを表している。Ｃさんはその母親の姿を通して“家族のそばに居る結婚”を志向し，家業を継ぐことを拒否して専業主婦を選択した。

性別役割分業の危うさの実感から展望した『継続就業の結婚』

『継続就業の結婚』を展望し至った者は２名であった。そのどちらもが母親の性別役割・家庭第一主義の姿から影響を受けていた。

この２名に共通する認知は，性別役割分業である「男は仕事，女は家庭」の夫婦関係にあって，暴君な父親に耐える母親の姿であった。Ｅさんはその両親の結婚生活の崩壊（離婚）を経験し，Ｄさんは父親に耐える渦中で母親を亡くしていた。二人の母親はそれぞれ，父親を手伝う労働主婦（Ｄ）と専業主婦（Ｅ）であった。その両親の夫婦関係は，「私らが小さい時には，両親の姿って言ったら夫婦ゲンカしている姿しか思い出にない（Ｄ）」「自分の記憶にあるのは，父親が母親に手あげているとこ，怒っている姿しか記憶にない（Ｅ）」と語り，いずれも不仲な親の夫婦関係を目の当たりにしていた。母親は生活の全てを夫（父親）に依存し，その関係は父親しだいで経済的にも，家庭的にも不安定になった。その状況の中で父親（夫）に従い耐えて苦労する母親に対し，協力者たちは「子ども心に可哀想やなって思いが（Ｄ）」「母親は私が守らなアカンと思った（Ｅ）」など，労わる言葉が語られていた。しかし，一方では「何で（父親と）別れへんの？って尋ねたことがある（Ｄ）」「母親は母親で違う意味で頑張れたんじゃないかなと思う（Ｅ）」など，耐え続ける母親への疑問も同時に語っていた。この協力者たちは，いずれも専門職に就き，仕事における実績も挙げていた。

事例Ｄ

「子どもが好きだから，子どもが早く欲しかったし，高校時代から付き合っていた人はいたわけだから，早く結婚したいという気はあった。結婚に憧れてたし。でも，結婚したら家庭に入ろうとは思ってなかったな。仕事にプライドも持ってたし，専業主婦にはなりたくなかった。自分のお金は持っておきたいという思いもあった。」

事例Ｅ

「仕事は一生続けて行こうと思ってました。結婚は考えてなかったね。将来，絶対結婚するとは思ってなかった。自分の親のことも有ったし，苦労するんだったら結婚したくないと思ってた。自分の力で生きていく。男の人に依存したくない。そういう力も自分にはあると思ってたし。だけど，仕事も落ち着いて自分もその年齢になってきて，私と結婚したいという人が現れた時に，“結婚もいいな”という気持ちが出てきたね。」

ＤさんはＥさんとは異なり，子どもが欲しいという思いから，当初から結婚に憧れていた。このように，ＤさんとＥさんの結婚に対する思いは異なったが，その選択は一様に『継続就業の結婚』であった。

この２名には経済的困窮と不安定な家庭という共通点がある。山田(1996)は女性の結婚は，今までの人生を変え，新しい人生を送ることが出来る「生まれ変わり」と述べている。実際，二人にとって単に家庭の安定や経済的困窮の解決であれば，それを満たせる男性との結婚という選択もあったでだろう。しかし，この二人はそれを選択していない。結婚の展望の中で,「自分の力で生きていく（Ｅ)」「男の人に依存したくない（Ｅ)」「専業主婦にはなりたくなかった(Ｄ)」「自分のお金は持っておきたい（Ｄ)」など，経済面・生活面の基盤を，全て男性に依存し委ねることを拒否している。暴君の父親と耐え続ける母親との関係は,「男は仕事, 女は家庭」という性別役割分業における支配―従属関係(東・小倉, 1994)の極端なアンバランスである。「何で（父親と）別れへんの？」と語ったＤさんの言葉は，その極端な関係への疑問を表している。母親は「あんたらが，おるからや（Ｄ)」と答え，子どものため，家庭を守るため耐えていた。しかし，母親に社会的・経済的自立を果せる資源（以下，自己資源）があれば，どうだっただろうか。Ｅさんが語った「母親は母親で違う意味で頑張れたんじゃないかなと思う」には，父親との依存する関係を変え，異なる生活をしようとしなかった母親への疑問が表れている。母親が耐え続けた背景に，自己資源が無く夫（父親）に依存せざるを得なかった実状を，娘たちは気付いていたのではないだろうか。したがって，この二人にとって母親の姿は「男は仕事，女は家庭」という，夫に依存する結婚の危うさと言える。そして, その危うさの実感は, 自ら職業を持ち自己資源を獲得する選択へとつながっていった。この二人の協力者は仕事においても実績を積み，結婚当時には管理職のポストに就いていた。したがって，二人にとって仕事は自己実現や自身の生き甲斐であったことは言うまでもないが，この危うさの実感は「専業主婦にはなりたくなかった（Ｄ)」「自分のお金は持っておきたい（Ｄ)」「自分の力で生きていく（Ｅ)」「男の人に依存したくない（Ｅ)」という枠組みとなり, 継続就業の結婚を選択した。

娘の結婚展望に影響を及ぼした母親像の認知

先述してきた事例は，すべて協力者自身の結婚展望に，母親像の認知が大きく影響を及ぼしていた。そして，その展望は10代の青年期には形成されていた。

娘の母親像の認知と展望・選択した結婚をTable 4 にまとめた。このように見ていくと，娘の母親像の認知が“依存せざるを得ない母親”,“拡大家族のために働き苦労する母親”,“仕事熱心で家族のそばに居ない母親”というようにnegativeに捉えたものと，“頑張って家庭を守る母親”といったpositiveに捉えたものとに分かれた。そして，その認知から展望した結婚は“依存せざるを得ない母親”→“依存しない結婚”・“自分の経済力を持つ結婚”，“拡大家族のために働き苦労する母親”→“核家族の専業

Table 4　母親像の認知と娘が展望・選択した結婚

母親のタイプ	母親像の認知	展望した結婚	選択した結婚
専業主婦	依存せざるを得ない母親	男の人に依存しない結婚	継続就業の結婚
労働主婦	頑張って子どもを育て家庭を守る母親	母親のように家庭を守る結婚	ふつうの結婚
	拡大家族の中で苦労する母親	核家族の専業主婦	ふつうの結婚
	依存せざるを得ない母親	専業主婦でなく 自分の経済力を持つ結婚	継続就業の結婚
職業主婦	仕事熱心で家族のそばに居ない母親	家族のそばに居る結婚	ふつうの結婚

主婦”，“仕事熱心で家族のそばに居ない母親”→“家族のそばに居る結婚”というように，母親像の認知がnegativeであった者は，その母親像とは異なる，むしろ対極にある結婚を展望していた。ここで言う対極とは，単に“働く主婦”→“働かない主婦”という性別役割分業の対極だけでなく，“拡大家族の労働主婦”→“核家族の専業主婦”というように，同じ性別役割分業であっても質的な対極を含む。一方，positiveに認知した者は“頑張って家庭を守る母親”→“母親のように家庭を守る結婚”というように，認知した母親像と同様の展望を抱いていた。この傾向は『ふつうの結婚』・『継続就業の結婚』，どちらの形態であっても認めた。

伊東（1997）は，女性の結婚意思（結婚したい気持ち）に有意な影響を及ぼしているのは，自身が抱いている「結婚に対する一般的態度」（肯定的・否定的）であり，その「結婚に対する一般的態度」には「親の結婚の幸福度」，つまり親の結婚生活が幸福か，否か，という娘の認知の違いで異なることを明らかにしている。そして，特に女性の場合，母親という結婚モデルが，その「親の結婚の幸福度」に大きく影響を与えていると述べている。本事例では，母親の姿を娘がどう捉えたかによって，娘自身どのような結婚イメージを抱き，どんな主婦・母親になりたいかも含んだ結婚展望を示していた。本事例は伊東（1997）の，「親の結婚の幸福度」における母親の結婚モデルと娘の認知，そして，その認知が娘の「結婚に対する一般的態度」や結婚意思にどう影響を及ぼしているのか，という実態を示した事例と言えるだろう。さらに，「親の結婚の幸福度」として母親の結婚モデルを見たとき，事例Ａのようにnegativeに捉えていても，その意思は“結婚したい”であり，“拡大家族の中で苦労する母親”→“核家族の専業主婦”といった，性別役割意識の質的な変化があることも示唆したと言える。

親の態度の違いから，異なる径路を示した『ふつうの結婚』

親の態度には２つのタイプがあった。１つは娘に性別役割を期待し，専業主婦の結婚を望む態度。２つ目は，娘の進路は結婚も含め，あくまでも娘の自律性を尊重する態度であった。

親の性別役割期待から至った『ふつうの結婚』

事例Ｆ

「（高校卒業時）自分で何に成りたいか，どうしたいか出てこなかったですね。どうせ，何年か働いて，ちょっとしたら嫁にいったらいいと，結局はそれがあったんですよ。親もそう言っていたし。父親は堅い人で“女は手に職を持たんでいい”と，“女が手に職を持つと，その稼ぎをあてにするような男が現れる”と。自分も“そうなんかなぁ”と思っていたし，そんな稼ぎをあてにするような男の人に付かれたらイヤですもん。親はやっぱり娘のこと思っているんやね。娘が，そんな働かないとやっていかれないようになったら困ると。私も，もちろんイヤでした。

そうゆう，自分(の結婚)にならないためにも，手に職は付けられなかったです。」

事例Ｇ

「得意分野で（４年制）大学，まぁ４年制（大学）行きたかったんだけど。うちの父親はそんな“女に勉強なんか要らん”と，“それよりも結婚に有利な学歴だけ身に付けろ”と，いわゆる当時は短大だけども，“短大やったら行かしたる”って。まぁ父親は，短大出て２年ぐらいお勤めして，お嫁に行くというのが女の幸せみたいな，娘もそれにさしたかったっていうのがあったみたい。家に経済力がないわけではないので，父親の考えやろうね。父親は余りに理解なさ過ぎるとすごい反発もしたけど，今から思えば，やっぱり愛情の一環やったんやね。(中略) 21（歳）のころには仕事で生きていく気はなかったな。その時には“ふつうに結婚したい”と思ってた。」

Ｆさんは事務職を経て，22歳で結婚。Ｇさんは，父親への反発から一度は家から離れ一人暮らしを始めた。短大には進学せず，専門学校やアルバイトなどを経験したが，当時，交際中であった男性から家へ戻り定職に就くことを求められ，結局，Ｇさんは家に戻りＯＬとなった。その後，その男性と23歳で結婚した。

この２つの事例では，娘の結婚について『ふつうの結婚』すなわち“家庭に入る専業主婦”を父親が強く望んでいた。ちなみに，本研究の協力者が母親からこのような示唆を受けた者はいなかった。父親は，進学や職業選択において父親自身が考える結婚に支障のない選択，望ましい選択を促し，枠組みを設けている。父親が考える望ましい選択とは，高学歴を付けず，専門職に就かないというものである。父親は母親よりも性別役割を強く望み，“男らしさ”“女らしさ”に基づく養育態度を，より示す傾向がある（リン，1981)。

本事例の協力者たちは，父親の枠組みに対し一時期の反発はあっても，「親はやっぱり娘のこと思っているんやね（Ｆ)」「愛情の一環やったんやね（Ｇ)」と理解を示している。Ｆさんは「何年か働いて，ちょっとしたら嫁にいったらいいと，(中略) 親もそう言っていたし（Ｆ)」の語りから，日頃より結婚については，仕事を辞め家庭に入るものという示唆を受けていたことがうかがえる。そしてＦさん自身，父親からの枠組みを受け入れた。伊藤（1995）は親の性別分業意識や子どもに対する性役割期待の養育態度を，娘がどう受け止め評価するかによって自身の職経歴選択（専業主婦型・職業主婦型）に違いがあることを明らかにしている。それによると，親の伝統的役割分業や家庭第一主義の態度に娘が肯定的であるほど，自らも専業主婦型の職経歴を指向する。このことより，日頃から「結婚すれば家庭に入るもの」という，親の性別役割意識をＦさんは肯定的に受け止め，自らも同じ選択をした。

では，父親の枠組みに反発したＧさんはどうであろうか。その後「仕事で生きていく気はなかったな。その時には“ふつうに結婚したい”と思ってた」と，その考えが父親と同じものに変化している。Ｇさんは，短大には進学せず，一人暮らしをし，専門学校やアルバイトなど自ら模索を行っている。しかし，交際していた相手から，家に戻ること定職に就くことを求められ，従った。現在もそうであるが未婚女性の多くは親と同居し，自宅通勤をしている(内閣府，2003)。交際相手はこの枠組みを求めた。つまり“ふつうの女の子”である。この出来事は，結果として父親の望んでいた『ふつうの結婚』へとつながっていく。藤田・土肥（2003）は，“恋愛や結婚生活は個人の意見だけが反映するものではなく，相手との関係次第，相手の出方

次第，相手あっての話，という個人的な関係性の中での意見に基づいている。”と述べている。恋愛中の男女はジェンダーステレオタイプに従った行動をとり（青野・森永・土肥，2004），さらに男性はパートナーとして，女性に伝統的な女らしさを期待する傾向がある（小倉，2007）。つまり，親元を離れ，自身の生き方を模索しても，相手が“ふつうの女の子”を望み，その相手との関係を考えたならば期待する枠組みに，はまっていかざるを得ないのである。Gさんにとってこの出来事が，父親の望んだ結婚の意味を実感することとなり，考えの変化をもたらした。

自律性尊重の態度でも至った『ふつうの結婚』

事例H

「23年ぐらい前になるので，世間的にも女の子は結婚退職がほとんどの時代だったので，そう思っていました。友達もそうだったので。入った会社も寿退社がほとんどで結婚前の若い子か，子育てを終えた年齢のパートさんで，間の人は居ない職場でした。（中略）私の場合は高校卒業後，勤めていた会社をとにかく辞めたくて，結婚を決める前に退職を決めてしまいました。その中途半端な時期に結婚が決まったので，結局，専業主婦になってしまいました。親はどう思っていたのかは正直わかりません。」

事例Ｉ

「結婚はいつかするだろうし，したいと思っていたと思います。でも，具体的にどんな結婚をしたいとまでは考えていなかった。仕事は結婚までの腰掛のつもりで働いていたわけではないので，結婚したら辞めるとか決めていたわけではないです。その時の状況で決めるつもりでした。親と結婚後は仕事を辞め家庭に入るとか，話をしたことはないが，姉たちも働き続けている者も居れば，家庭に入った者もいるので，親はそこまで介入する気はなかったと思います。

職場は人間関係が良かったから，楽しかった。でも，みんな結婚して辞めて行ったから。先輩も次々と結婚したからね。“私も次行かないと，（職場で）一番古くなる”って思ってました。どんどん若い子も入ってくるし，“ついていけへんわ”と思って。“次（の寿退社）は私行かないと”って思ってました。」

この両事例では，「親はどう思っていたのかは正直わかりません（H）」「親はそこまで介入する気はなかったと思います（Ｉ）」の語りからも，親から結婚に対しての具体的な示唆はなく，Hさん・Ｉさん自身の選択に任されていたことがうかがえる。また，結婚の展望の語りに母親についての言及もなく，既述の事例のような母親像の認知による，直接的な影響もうかがえなかった。

Ｉさんは当初，「結婚し家庭に入る」とは考えていなかった。しかし，職場における“寿退社”の慣習が，Ｉさんに「家庭に入る結婚」を意識させ選択させた。先輩は次々と結婚退職し，若い女性社員が入って来る。つまり，気がつけばベテランに押し上げられていくという状況であった。寿退社が慣習という限られた集団の中で「ベテランになっていく」ということは，「結婚できない」という意味も表している。実際，30歳を過ぎても結婚せず，職場にいる女性を「お局さま」（落合，2007）と揶揄する背景がここにあると言えるだろう。そのため「次は私が寿退社しなければ」という思いと共に，「家庭に入る結婚」への流れとなっていった。

一方，HさんはＩさんより早い段階で友人や世間といった周囲から，「結婚退職し家庭に入るもの」と捉えていた。そして，さらにそれを後押ししたのは職場における“寿退社”という慣習であった。Hさん自身は，結婚前に退職しているが，いずれにしても退職せざるを得ない

職場環境であったことは同じである。

Ｈさんも Ｉさんも，どのような選択をするかは自身に任せられていた。しかし，その状況にあっても『ふつうの結婚』へ至った径路には，「女性は結婚すれば，家庭に入るのが当たり前」という社会通念による“寿退社の慣習”の影響を受けた。

４．総合考察

本稿の協力者たちが『ふつうの結婚』と象徴したのには，１つには1980年代に盛んとなった「脱ＯＬ」「脱専業主婦」との対比と，２つ目は親たちが目指した専業主婦が実現できる結婚という，２つの意味が存在したと考える。

協力者たちが象徴した『ふつうの結婚』とは，家庭に入り，夫の収入で核家族を築く結婚である。事例Ｇでは，当初は４年制大学への進学を志し，「21（歳）のころには仕事で生きていく気はなかったな」の語りからも，最初はキャリアを積む女性を志向していたことがわかる。このことは80年代に盛んとなった，「脱ＯＬ」「脱専業主婦」を目指した当時の女性の動向を示している。

一方，事例Ａ・ＢやＦのように母親は大家族や家庭を支えるため，また夫の仕事を手伝うために労働している姿があった。協力者たちはそれら親たちの結婚生活を踏まえ，核家族の専業主婦や家庭のことに専念できる結婚が立ち現れ，それを『ふつうの結婚』と言い表していた。

すなわち，協力者たちは1980年代から盛んとなった「脱ＯＬ」「脱専業主婦」という意識変化と，戦後にかけて一般化した専業主婦に象徴される結婚との狭間で，結果として『ふつうの結婚』を展望していた。

80年代に起こった意識変化は，「ただの主婦」「ただのＯＬ」と一般化し平凡となった女性のライフコースに，自身の生き甲斐や自分らしさの“上乗せ”を求め起こったものである（斎藤，2001）。荷宮（2004）は80年代の生き方を志向した女性について「金も仕事も，夫も子どもも欲しい生き方」と述べている。つまり，欲しいものを自身で手に入れることが出来るお金を持ち，そのお金の獲得のためにも仕事は努力し続ける。そして女性の幸せとして結婚も望む姿である。

しかし，「脱ＯＬ」「脱専業主婦」が盛んとなった80年代ではあったが，その生き方を実現するには多くの条件が必要であったと考える。以下に本研究の事例と照らし合わせ，実現するための条件と実際の結婚までの経緯を論じた。

協力者たちは，進学・職業選択においても親から「高学歴・職業の専門性不要」という影響を受けていた（事例Ｆ・Ｇ）。結婚を規定する要因には，親の影響の他に，学歴・職業・適齢期・経済力などが挙げられている（小倉，2007；東他，1994前出）。特に学歴は，その違いで従事する職業や結婚に求める条件が異なることや（小倉，2007），高学歴の女性ほど継続就業の意識が高いなど（井上・江原，2005），女性にとって学歴・職業は結婚との親和性が高い。このように職業選択には学歴が関係する。高学歴によって選択できる職業の幅や専門性は広がり，例えば，教員・公務員・専門職・研究者など，これらに従事する女性と，「寿退社」を慣習とするＯＬであった協力者たち（事例Ｈ・Ｉ）とでは，どのような結婚を展望するかは，自ずと違ったであろうことは容易に推察できる。

また学歴には男女の格差が存在する。親が受けさせたいと考える教育程度は，1973～1983年では男子は４年制大学までと考える親は約７割と多いのに対して，女子は高校や短大・高専までと考える親で約７割を占め，４年制大学までと考える親は２割にすぎなかった（NHK放送文化研究所，2005）。本稿の協力者たちの進学

時期であった1975～1980年の女子の進学率は，中学から高校へは９割以上で，高校から短大が約２割，４年制大学へは約１割であった（総理府，1990）。すなわち，1980年代に結婚を経験した女性たちの学歴の多くは高校卒業であった。本研究の協力者の学歴は，その80年代に多かった高校卒業が中心であり（Table１），偏ったものでないと言える。実際，協力者たちの中で４年制大学の進学を親から勧められた者はなく，進学を希望したが父親の反対を受け，学費など入学に伴う協力が得られないことから断念したという経緯があった（事例Ｇ）。これらのことは，1980年代の女子の高学歴実現には親の理解が必要であり，それに伴う職業選択にも影響を受けたことを示している。

「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の意識変化が盛んであった80年代であっても，現実には「結婚すれば家庭に入るのが当たり前」という社会通念は顕在したと考える。事例Ｈ・Ｉが語ったように職場には寿退社の慣習があり，女性は次々と退職するため，結婚後も仕事を続けキャリアを積んでいる女性は居なかった。つまり，「仕事も家庭も」を実践している女性モデルは職場には実在せず，中核を成していたのは高度経済成長の中「妻が家庭にいる結婚」を指向し実現させてきた男性たちであったことは自明である。また，ＯＬという職業は既述したように結婚までのものという背景がある。これらの状況が重なる職場では意識の変化は起こりにくく，「結婚すれば家庭に入るのが当たり前」という従来からの社会通念は当然のごとく顕在していたと考える。事例Ｈ・Ｉは，この真っ只中にあって結婚退職に当てはまっていった。

本研究で「継続就業の結婚」を目指した協力者たち（事例Ｄ・Ｅ）の配偶者選択は，仕事を続けることを尊重し望む相手や反対をしない相手を選択していた。しかし，交際相手が望む女性像と自身が求める女性像とが異なり，相手との関係性から「仕事で生きていく気はなかったな。ふつうに結婚したいと思ってた」と，その考えを変更した事例（Ｇ）もあった。

これらのことから，80年代を象徴する「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の実現には，自分自身の努力もさることながら，実現できる職業に就くため，進学や職業選択に親の理解が得られること，さらに，当時も顕在した「結婚すれば家庭に入るのが当たり前」という社会通念の影響を受けない職種や自身の態度，そして，配偶者は「仕事も家庭も」の生き方を理解し認める相手であるという，これらの条件を満たせなければ実現できなかったと考える。

以上のことから，1980年代に結婚した女性の経緯は，「脱ＯＬ」「脱専業主婦」という新たな流れを感じつつも，親の性別役割意識の影響を受け立ち現れたのは『ふつうの結婚』と象徴する記号であり，そして，その記号は進学や職業，配偶者選択を規定しガイドするものとして機能した。また、一方では顕在した「結婚すれば家庭に入るのが当たり前」という社会通念の影響を受け，それらの結果，すでに一般化した専業主婦の結婚へ至るという経緯も多かったと考える。

現在，結婚後も仕事を持ち続ける両立型志向の増加や，女子の教育程度も約５割の親が大学までと考え（NHK放送文化研究所，2005），女性の進学や就労に対する意識は変化している。また性別役割意識も，80年代の「脱ＯＬ」「脱専業主婦」の流れから「男は仕事，女は仕事と家庭」となり，現在はさらに「男は仕事と家事，女は家事と趣味的仕事」という新・新・性別役割意識へと変化している（小倉，2007）。本研究で示した，進学・職業，そして配偶者選択を規定しガイドするものとして機能する記号は，親の影響を受け形成されることから，何を内在化するかは時代や社会背景によって異なると考える。今後の課題として，現在における親の性

別役割意識とはどのようなもので，どんな影響を及ぼしているのか。また，その影響を受け現在の女性たちに立ち現れている記号とはどのようなものか，今後さらなる調査・検討が必要と考える。

謝辞

本研究のインタビューに快く応じてくださった協力者の皆さま，数多くのご指導・ご意見をくださった，森直久先生・安田裕子さんをはじめとするTEM研究会の皆さまに，心より感謝いたします。

引用文献

青野篤子・森永康子・土肥伊都子（2002）ジェンダーの心理学〔改定版〕「男女の思い込み」を科学する．ミネルヴァ書房．

東清和・小倉千加子（1994）「性役割の心理」．大日本印刷．

藤田達雄・土肥伊都子（2003）「女と男のシャドウ・ワーク」．ナカニシヤ出版．

伊東秀章（1997）未婚化に影響する心理学的諸要因―計画行動理論を用いて―．社会心理学研究，*12*(*3*)，163-171.

伊藤裕子（1995）女子青年の職経歴選択と父母の養育態度―親への評価を媒介として―．青年心理学研究，*7*，15-29.

井上輝子・江原由美子（2005）「女性のデータブック第４版―性・からだから政治参加まで」．有斐閣．

金野美奈子（2001）「ＯＬの創造―意味世界としてのジェンダー」．勁草書房．

リン，D. B.（1981）「父親―その役割と子どもの発達」．今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森五（共訳）北大路書房．

内閣府編集（2003）平成15年版国民生活白書．ぎょうせい．

荷宮和子（2004）「なぜフェミニズムは没落したのか」．中央公論新社．

NHK放送文化研究所編集（2005）「現代日本人の意識構造〔第六版〕」．日本放送出版協会．

小倉千加子（2007）「結婚の条件」．朝日新聞社．

落合恵美子（2007）「21世紀家族へ 第３版 家族の戦後体制のみかた・超えかた」．有斐閣．

高橋恵子（1970）依存性の発達的研究：Ⅲ ―大学・高校生との比較における中学生女子の依存性―．教育心理学研究，*18*（*2*），65-75.

斎藤美奈子（2001）「モダンガール論 女の子には出世の道が二つある」．マガジンハウス．

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Valsiner, J.（2006）複線径路・等至性モデル―人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して．質的心理学研究，*5*，255-275.

総理府編集（1990）「女性の現状と施策〔新国内行動計画第２回報告書〕」．ぎょうせい．

Valsiner, J.（2001）*Comparative study of human ciutural development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

山田昌弘（1996）「結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか」．丸善．

（2008. 3. 31 受稿）（2008. 6. 16 受理）